

綱澤 満昭

高山樗牛について

高山樗牛（以下樗牛と記す。本名林次郎、山形県鶴岡に、斎藤親信の次男として生れ、翌年高山久平の養子となる）は、明治四年一月十日に生れ、明治三十五年十二月二十四日に他界している。短い一生であった。短かくはあつたが、その間、時代の流れとともに、紆余曲折し、さまざまな思想を引きずつた。彼にたいする評価は、いろいろである。

激情の人という評価もあれば、矛盾撞着の人、豹変者などと厳しい評価もある。そのような愚弄的、攻撃的な評価もあるが、樗牛の文章に酔いしれる若者も多く存在したのである。

彼の不思議な魔力ともいべき情念の発露に、多情多感な若者の魂は、揺り動かされたのである。

樗牛が没してから、彼の著書の近くを離れたくない多くの知的若者がいたという。

明治四十五年五月、『中央公論』に「高山樗牛氏」という一文を載せた戸川秋骨は、次のようにのべている。

「大体小生は高山氏を以てあまり豪き人とは思ひ居らず候、併しながら君の筆に一種の魔力あり、君の思想に一種の創見あるは争ふべからざる所にて、これはやがて君の生命に何物か潜み居りし故と存じ候、此の何物かを解釈し候は、高山氏の位置は明瞭する事と信じ居候。…(略)…なほ君は或は国家至上主義を称導し或は世界的思想を鼓吹し、終には宗教的に傾くなど、幾度か態度を変じて、才子豹変など、言れし事さへありしと記憶し居候が、これ則ち此の何物か、為さしめし仕業かと存じ候。而も此の何物かは君が該博なる知識と強烈なる感情とに依りて益々光輝を發したるやに考へられ候。」（『中央公論』明治四十年五月）

また、岡崎義恵は、昭和二十五年の時点でこうのべている。

「熱情を以て人生問題を論ずる書は、いつでも多くの愛読者を持つてゐる。樗牛が没して暫くの間、青年男女がその早逝を悼み、墓前に額づくやうにその遺著の傍を離れなかつたのは、

この激情を以て語られる人生の重大事に心を惹かれたからであらう。(略)私も青年時代に好んで樗牛を読んだ。その頃樗牛の愛読者には女学生が多いといふことを聞き、幾らか侮蔑の感をいだきながらも、やはり図書館などで読んでゐた。〔高山樗牛論〕(昭和二十五年)『高山樗牛・片上伸・島村抱月・生田長江集』(現代日本文学全集) 59、昭和三十三年)

多くの人の心情を吸引する要素を樗牛が多分に宿していたということに注目する必要がある。

短かい生涯の表層において彼の思想は変化が見られるが、それでも一貫して彼が持っていたものに、私は「煩悶」があったように思う。この「煩悶」は、樗牛の一生を通じて、その基底のところを流れている。これこそが多くの若者に受けた一要因ではなかったか。

思想が正しいか否か、整合性があるかないかといったところに固執するかぎり、人の魂を揺り動かす思想の本質は、わかっではこない。

明治二十四年に創刊された『文学界雑誌』に樗牛は、「人生終に奈何」、「厭世論」などを載せ、自分の内面に深々と存在するものを吐露し、無情なる現実世界の苦渋と疑いを世に問うた。「人生終に奈何」は次のようにはじまっている。

「人生終に奈何、是れ実に一大疑問にあらずや。生きて回天の雄図を成し、死して千歳の功名を垂る、人生之を以て尽きた

りとすべきか、予甚だ之に惑ふ。生前一杯の酒を樂しむ、何ぞ須ひん身後千載の名、人は只々行樂して已まんか、予甚だ之に惑ふ。蝸牛角上に何事かを争ふ、石火光中に此身を寄す、人は只々無常を悟りて終らんか、予甚だ之に惑ふ。吁、人生終に奈何、將た人は只々死するが為に生れたるか。〔文学会雑誌〕(明治二十四年六月)『樗牛全集』第六卷、日本図書センター、平成六年)

そして次のごとく結ばれている。

「生前の事業、夢中の觀の如く、死後の名聞、草露の如くれば、茫然たる吾が生、夫れ何くにか寄せん、大哀と謂はざるべけんや。嗚呼人生終に奈何。予、往を顧み來を慮り、半夜惘然として吾れを喪ふ。」(同上書)

宇宙世界の無限、永遠ということからいえば、人の名前など、死して直後に消え去るのも、千年たつてなくなるのも大差はない。天下の形勢を一変するほどの雄々しい企てをなしとげたとて、どうせそのようなものも、所詮は虚名にすぎないという。

この樗牛の考えは、次の年の「厭世論」につながる。

人が未来に望みをつなげることを否定することはない。しかし、その未来は未来であつて、いずれいつかは出現するといふのは大きな誤りである。万物が実在するのは現在においてほかにない。すでに去つたもの、いまだ到来していないもの、すべてこれらは実在するものではない。彼はこういふ。

「人間の歴史は希望の歴史なり、否、希望を求めて煩悶するの一大哀史なり。吁、希望乎、希望乎、希望は終に得べからざる乎。世界の『時』と生命とが、滔々として此の大的的に向つて進行するにも係らず、五千年後の今日尚ほ此の問題の解釈に一步を進めたるの跡を見ず。豈悲しからずや。」（『厭世論』『樗牛全集』第四卷、日本図書センター、平成六年）

明治二十七年には、軽い気持で応募した「瀧口入道」が『読売新聞』の懸賞小説で優等賞第二席（第一席は該当者なし）に入った。

明治二十八年には『帝国文学』とか『太陽』に、近松巢林子についての諸論を書いている。この近松研究は、のちの「美的生活を論ず」につながっていく。

明治二十七年、八年は日清戦争で、日本はナショナルリズムの昂揚期であった。樗牛の眼前にも、国家、日本という怪物がうろつきまわる。

明治三十年五月、『太陽』に「日本主義」なる論文を発表し、日本主義者高山樗牛の名を世間にとどろかせた。この「日本主義」を第一声として、その後、次々と日本主義、国家主義に関するものを発表する。いくつかをあげれば次のようになる。いずれも『太陽』掲載。

「日本主義と哲学」（明治三十年六月）、「日本主義に対する世評を概す」（明治三十年七月）、「世界主義と国家主義」（明治

三十年七月）、「我国体と新版図」（明治三十年十月）、「国粹保存主義と日本主義」（明治三十一年四月）、「日本主義と大文学」（明治三十二年四月）。

「日本主義」の冒頭の部分を引用しておく。

「熟々本邦文化の性質を考へ、宗教及び道德の歴史的關係を審にし、汎く人文開展の原理に徴し、国家の進歩と世界の發達とに於ける殊遍相關の理法を認め、更に本邦建國の精神と國民的性情の特質とに照鑑し、我が国家の將來の爲に、吾等は茲に日本主義を唱ふ。日本主義とは何ぞや。國民的特性に本ける自主獨立の精神に拠りて、建國当初の抱負を發揮せむことを目的とする所の道德的原理、即ち是れなり。」（『高山樗牛全集』第四卷）

人生の煩悶に直面し、近松研究に傾注し、愛と悲哀を感傷的に高唱していた樗牛も、日清戦争という、日本にとつてのとてつもない大きな事件を機に、国家への関心、日本への興味を強めるにいたった。内面へ、内面へと走っていた樗牛が、にわかには国家とか日本という政治的問題に関心を移していったということは、なにを意味しているのか。

私は、この場合、ここに樗牛の変質を見るのではなく、国家や日本の問題を考えることが、彼の内部生命の發露につながったと見るべきではないかと思う。つまり、彼の強烈な内部生命の情熱が、国家、日本を必要としたというべきかもしれない。

樗牛のいう日本主義とはいかなるものか。要点を次にあげておこう。

「国民の円満なる発達、其の国民的性情の完全なる発達を須要とす。二、一切宗教は日本国民の性情に適切ならず。日本主義は是れを以て宗教を排斥す。三、国家は人生寄託の必然形式にして又其の唯一形式なり。日本の国家は日本国民の幸福の唯一且つ必然の形式なり。四、宗教と国家とは其の利害を異にす、之を以て日本主義は一切の宗教を排斥す。五、日本主義は日本国民の性情に本きて、皇祖建国の精神を發揮せむことを目的とする所の国家的道徳の原理なり。」(同上書)

人生の煩悶に深く、強くはまっていた樗牛も、日清戦争を契機にしたナショナリズムの昂揚に、無関心ではいられなくなつた。この日清戦争は、次の日露戦争と違つて、賛辞を表した知識人もいた。

この日清戦争は、日本の民衆にとつて、大きな意味を持った。それまで田畑で鋤や鎌を持つて、日常を過ごしていた人たちが、突然銃を持ち軍服を着て、異国の地に立ち、国家、天皇を意識し、国民を意識したのである。

初々しい新生日本国家の意気軒昂たるものが漲っていた。一定の国際的地位の確立による新生日本の空気を樗牛は、自分の生の充実に引き入れたかつたのかもしれない。人生の目的は生の充実にあるが、その生の充実を果すために、樗牛には、

国家が、日本がここでは必要だったのである。自我の主張、確立と国家の発展との統一は、じつに快い気分になることであつた。

しかし、樗牛は国家賛美にたいしてブレーキをかけることを忘れてはいない。それは、国家の存在はどこまでいっても、個人の幸福を助け、保障するためのものでなければならなかつた。個人あつての国家であり、国家あつての個人ではないという。

樗牛は、国家と個人の幸福の関係を次のようにいう。

「吾人は国家を以て至上の権力と認め、其の利福を以て道徳の規準となす。是れ何が為なるか、人生の幸福は独り是れによりて円満なるを得なければなり。人生の目的は幸福にあり。所謂道徳なるものは是の幸福を実現するの方向に外ならず、幸福は形式上詮ずる所自我の満足なり。」(同上書)

国家に至上の権力を与えるのは、それは、あくまでも個人の幸福を保障し、達成してくれるからであつて、国家そのものが目的ではない。国家を目標にして、すべてがそこに収斂されてゆくという方向を彼はとらないのである。いわば、国家は相対的なものだという。

日本主義、国家主義を説きながら、それらの絶対的価値を認めていないところに、樗牛らしさがある。

橋川文三も、この点にふれて次のようにのべている。

「樗牛において、国家価値の絶対化(＝自己目的化)はむしろ

る主張されていない。価値的に絶対的なるものは、いかにも上昇期の産業資本主義社会にふさわしい個人的功利と幸福の理念であり、国家価値はその目的合理性の見地から形式的に主張されているにすぎない。いわば現実の日本国家の合目的性で形式的に承認されるかぎり、樗牛はその価値達成の手段として国家の体制的価値を承認するという形である。彼の志向対象は、むしろ終始ブルジョア的人間価値におかれていた。〔「高山樗牛」『日本の思想家』(2)、朝日新聞社、昭和三十八年)

そもそも最初から国家の絶対化ということに主眼を置いていないのであるから、樗牛の国家主義から個人主義への移行、転換は、それほど極端な変化ということではなかった。

したがって、それまでに寄せていた国家への恋情、忠誠そのものの空虚さに気づけば、また、個人の幸福に寄与できない国家の姿が表面化してくれば、国家への志向性は鈍くなってくるのは必然である。

研究者樗牛にとって、願ってもない機会がめぐってくる。

明治三十三年六月のことである。樗牛は、文部省より、ドイツ、フランス、イタリアへの留学(三年間)が許可された。留学を終えて帰国すれば、京都帝国大学での教授のポストも約束されるといふ幸運が間近かにせまってきた。妻には長女も生れ、樗牛は欣喜省躍の心境であった。

しかし、人生はそううまくはいかない。幸運は長くは続かな

かった。留学のため、日本を離れる日が近づいたとき、樗牛は突然咯血したのである。

入院を余儀なくされ、転地療養の生活をはじめることになる。暗くて重い空気が樗牛を襲った。千載一遇の機会を逃してなるものかという焦りには悲痛なものがあった。

とりあえず、留学の出発延期願いを提出し、健康回復に向けて懸命の努力をしようとする。かすかな望みがまだ残っていた。しかし、病魔は樗牛をして、ついにこの留学を断念せざるころに追い込んだ。

病に倒れ、留学の夢はたたれ、樗牛の心情は凄愴の極みであった。絶望の淵に立たされた彼は、まるで悪夢を見ているようであったにちがいない。

留学を断念したことを樗牛は親友姉崎嘲風に次のように伝えた。

「洋行は断然見合はせることに決心した。(略)：自分一人ならぬ身の、かばかりの病気のために、数年来の希望を空しうするのには是非もないが、いさ、か遺憾にたえぬ。(略)：あ、過ぎ去れることは是非もない、さればとて僕はこれと云ふ未来の見透しもない。か、る時に人は往々薄志弱行に陥るものと覚悟はして居る。あ、君ならで誰か是の僕の哀情を察して呉れるであらうか。」〔『樗牛全集』第七巻、日本図書センター、平成六年〕

筆の力で多くの若者のこころを引きつけ、各方面より、脚光をあびていた樗牛にとって、この状態はとても耐えうるようなものではなかった。

このような状況下に置かれた人間にとって、こころの外にある問題、例えば国家とか日本とか、平和とか革命といったものが、いかに空虚なものであったことか、大義名分など、樗牛にとっては、もはやくず籠に捨てられたゴミのようなものであった。

焦燥、不安、苦渋からの避難のみが人生の目的となる。

絶体絶命の淵に追いやられた樗牛は、それまで罵倒して憚らなかった宗教にたいして、強い関心と同情を持ちはじめたのである。

宗教の主張は迷信であり、その改善も滅亡であるといいつつていた彼のこの変転ぶりは、あきれるばかりである。精神の革命か。

国家も日本も、そして彼が懸命に学んだであろう近代的「知」に基づく道徳や倫理に関する学問も、もはや彼の心情をいやすことはなかった。

あれほど踏み込んだ日本主義も、表面しか見ない浅慮なものでしかなかったのだという。

明治三十四年六月二十四日、ベルリンにいる姉崎嘲風に樗牛は、次のような手紙を書いている。

「此頃の僕の精神には、此の一兩年の間に醗酵し来たかと思はれる一種の変調が現はれて来た。人は病的と謂ふかも知れぬ、又自分でも境遇、健康等の為に然るのかも思はれるが、併し僕は僕の精神の自然の発展と外信し得られない。…(略)…僕は曾て日本主義を唱へて殆ど国家至上の主義を賛したこともある。今に於ても此の見地を打破るべき理由は僕には持ち得ぬ、唯是の如き主義に満足の出来ぬ様になったのは、僕の精神上の事実である。僕は道徳、教育、もしくは社会改良に関する今の人の説には、殆どすべて満足の出来ぬ様になった。…(略)…僕は宗教に關しても少からず考へた。曾ては一種の反感を以て迎へたが、今では如何なる宗教に對しても少くとも同情を以て見る迄になった。」(「大磯よりベルリンの姉崎へ」『樗牛全集』第七卷)

この状況下で、樗牛は「信」とか「情」の世界にたいする関心と妥協の姿勢を見せることになる。つまり、人間にとって究極的なもの、本望的なものが何であるかについて、本格的に考えはじめたともいえようか。

人性本然の要求をもとめ、そのための心情を吐露するのである。

相対的なものではなく、絶対無限的なものへの熱望が樗牛のこころを拘束するにいたる。

それまでの相対的なものを峻拒し、自分が真に依拠できる絶

対的なものの探索がはじまる。

明治三十四年八月、雑誌『太陽』に、樗牛は「美的生活を論ず」を書いた。人生における至上の幸福とは何であろうか。道徳や倫理を高らかに説いている「先生」や偽善に満ちた為政者、またそれに媚を売る人たちのもつともらしい権威主義的知的世界とは違うところに人間の幸福はあるというのだ。

次のようにのべている。

「何の目的ありて是の世に産出せられたるかは、吾人の知る所に非ず。然れども生れたる後の吾人の目的は、言ふまでもなく幸福なるにあり。幸福とは何ぞや、吾人の信ずる所を以て見れば、本能の満足、即ち是れのみ。本能とは何ぞや、人性本来の要求是れ也。人性本来の要求を満足せしむるもの、茲に是を美的生活と云ふ。」（『樗牛全集』第四卷）

ナシヨナリズム発揚の時期にあつて、樗牛のこの私的欲望、個人の幸福追求などは、常軌を逸した発言とみられても仕方ない。

道徳や理性というものが、他の動物と違って、人間固有のものであつて、それは高等なものだという見解に、樗牛はまっとうから反対する。

人生至楽の境地は、本能、性欲の満足を離れて、どこにもないと断言する。このように高言して憚らない樗牛に、支援、弁護の風は吹くことはなかった。攻撃、嘲笑の嵐が彼を直撃し

た。

当時、次のような批判があつた。

明治三十四年八月十九日、二十六日の『読売新聞』で、長谷川天溪は、「美的生活とは何ぞや」で次のようにのべている。幾個所か引用しておこう。

「古名家の一世一代の行為を、腐儒のお談識で解釈しやうといふは、固より誤つても居る、亦愚の極でもある。然しながら、此点から推して、本能の要求を満たす行為の連絡が、美的生活であつて、知識や、道徳やの追求は、相対的である、其物の価値は薄少であると断言するのも、亦誤謬であると言はざるを得ない。」（『長谷川天溪文芸評論集』岩波書店、昭和三十年）

「敵を見て逃げ出す人は、生命が惜しいといふ、人間一般の要求に基いて、之を満足せしめた者であるから、其行為は美的である。色情の奴隷が、異性を追ひ回すも、亦其個人的性向を満足せしむる者であるから、美的である。高山君は果して此等の例をも美的であると、承認せらるゝであらうか。」（同上書）

長谷川は次のような文章で結んでいる。

「高山君は結論として『今の世にありて人生本来の幸福を求めむには、吾人の道徳と知識とは余り煩雑にして又余りに迂遠なるに過ぐ』とて、人間本性の要求に従つて、美的生活を送れと言はれたが、若しも其通りに世人が行動したならば、氏自身も擯斥せらるゝ物質主義が、益勢力を得て、さなきだに物質主

義の吾が社会は、終に精神なき穢土と変化するであらう。」(同上書)

各方面から、こつ酷い批判が乱れ飛んだ。世間の酷評を甘んじて受けとめた樗牛は、きわめて冷静であった。彼が拘泥したのは、そんなことではなかった。自分の主張する「美的生活論」が抵抗なく世間や権力に受け入れられることなど思っていたわけではない。しかし、そうであればあるほど、彼は「美的生活」を強調する必要がある、こたわる必要があったのである。留学希望の挫折と病態の悪化への対応には、権力追隨の学問や、世俗的倫理規範を打ち破る強力なパンチが必要だったのである。

非日常的言動のなかにこそ、彼の生命は辛じてその存在が可能だった。

人間と他の動物と区別するところのものが、道徳や理性だ。「道学先生」たちはいうが、それは世間体を恐れ、表皮の部分のみで構築された現実世界の偽善にたいして、真の肉声を主張する勇気を彼らを持つていないからだという。樗牛はこういう。

「道徳と理性とは、人類を下等動物より区別する所の重なる特質也。然れども吾人に最大の幸福を与へ得るものは是の両者に非ずして、実は本能なることを知らざるべからず。…(略)：世の道学先生の説くところ、理義如何に高く、言辞如何に妙なるも、若し彼等をして其の衷心の所信を赤裸々に告白するの勇

気だにあらしめむか、必ずや人生の至楽は畢竟性欲の満足に存することを認むるならむ。」(『樗牛全集』第四卷)

本来、人間にとつても、理性とか道徳というものは、不要なものであった。人間以外の動物はすべて本能のままに生きていく。そしてそこに過不足はない。なぜか、それは本能というもののなかに抑制機能があり、それぞれの領域で、これが機能して、必要以上の欲望にはブレーキがかかるようになっていくからである。

人間はいつの間にか、この大事な本能が破壊され、死んでしまった。したがって、抑制機能がきかないのである。きかないから、理性とか道徳とかをつくり、抑制する以外にない。文明の根源もここにある。

人間、とくに文明人と呼ばれる人たちは、本能破壊の方向に走ることを進歩と呼び、偽善の生活を蓄積してきた。

理性や道徳、倫理というものが、権力と結びつき、未分化、混沌、純粹にして無限の可能性を抹殺していったことを樗牛は知っている。破壊されてしまった本能の蘇生を彼は、「美的生活」と呼び、この生活を絶対としたのである。

樗牛も社会人として、社会の常識として自分を律することの大切さを知らぬではない。知っているからこそ、血肉の一部となつている道徳、理性に対抗するためには、その血も肉も絶滅させるほどの強力なものが欲しかったのである。

儒教的倫理規範からいえば、これは異常な世界であり、狂とも呼べる世界であった。腐敗墮落した倫理的世界を正常なものに変革するためには、この狂の力が必要だったのである。

本能、狂気に依拠することこそ、樗牛にとって、唯一の正常な道であった。迫りつつあった死の恐怖のなかで、主観の燃焼といえる「美的生活」の追求にかけける樗牛の姿がここにあった。

樗牛には、もはや時間がないのである。人生わずか五十年というが、その五十年も彼にとっては、かなわぬ時間であった。襲いかかってくる病魔に打ち勝つ手はない。一分一秒、時間を刻む時計の音が樗牛をびく／＼させる。「美的生活を論ず」は、次のように結ばれている。

「悲むべきは貧しき人に非ずして、富貴の外に価値を解せざる人のみ。吾人は恋愛を解せずして死する人の生命に、多くの価値あるを信ずる能はざる也。傷むべきは、生命を思はずして糧を思ひ、身体を憂へずして衣を憂ふる人のみ。彼は生れて其の為すべきことを知らざる也。今や世事日に勿劇を加へて人は沈思に違なし、然れども貧しき者よ、憂ふる勿れ。望みを失へるものよ、悲しむ勿れ。王国は常に爾の胸に在り、而して爾をして是の福音を解せしむるものは、美的生活是れ也。」(同上書)

自力の限りを尽しても、如何ともしがたい運命というものがある。たび重なる啖血で絶望しかない樗牛の精神は、乱れに乱

れた。それでも一瞬のこのころの安らぎが欲しい。絶望と悲哀は彼をして、なお激しく反時代的、反社会的姿勢を濃厚にする。嘲笑、罵倒があればあるほど、彼は親友である姉崎に依拠したい。

明治三十四年十一月十五日、ライブチヒにいる姉崎に樗牛は次のように書き送った。

「君よ、予は敗亡の身なりと云へり。げに／＼敗亡の身也、屈辱の身也、無念の身也。思ふこと内に結ばれて、外に狂者の如く想はるゝ身也。せめて是の体身の健かにして事に勝ゆべくむば、叶はざるまでも亦詮術べあれ。今の吾身は旦暮の薬餌是れ事として、書を読み筆を執ることだに心にまかせず、空しく青天白雲を望みて如是観を為すもの、あはれ敗亡の身に候はずや。」(『樗牛全集』第七卷)

こうなれば、一瞬にして天地を揺るがすほどの強力なものが欲しい。主情主義を突出させ、相対有限の世界に、絶対無限の生を願うのである。

さきの親友である姉崎への手紙には、衰弱し、絶望してゆく樗牛の心情がよく表現されている。

超人的、カリスマ的人間に、自分のすべてを預けてしまいたいのである。ニーチェや日蓮に注目したのも必然というほかない。

樗牛は天才の登場に期待する。論理的解釈などが必要なので

はない。決断と解決が要る。自分の魂を救済してくれるものが
すべてである。わずかに残された自分の生命の燃焼が欲しい。
現実につきりながら現実を超越しなければならぬ。そのため
には、道学先生のいう道徳とか理性とから離れ、「小児のこ
ろ」にかえるしかない。彼はこういう。

「嗚呼、小児の心乎。玲瓏玉の如く透徹水の如く、名聞を求
めず、利養を願はず、形式方便習慣に充ち満ちて一切現世の
桎梏を離れ、あらゆる人為の道徳、学智の繫縛に累はされず、
たゞたゞ本然の至性を披いて天真の流露に任かすもの、あゝ独
り夫れ小児の心乎。吾人素と学なく才なし。唯々野性の生れな
がらにして移し難きものあるのみ。年来人に離れ、世と絶し、
藐然として天地の間に嘯く。私かに想ふ、是の心それ或は小児
の心に邇からむ乎。」〔無題録〕『樗牛全集』第四卷)

世俗を脱し、なにもかも、つきぬけたところに樗牛は「小児
のころ」を見たのである。純粹無垢で清潔で神聖なものが
「小児のころ」である。

人はすべて、この「小児のころ」をもつて生誕するが、成
長するにともない世間の諸々の垢を拾い、原初的感覺を喪失し、
現実世界の「常識」という鑄型にはめられてゆく。「小児のこ
ころ」は、「童心」と呼んでもよからう。そしてまた、狂の世
界と呼んでもいい。

仮偽なく、純粹なものは狂の世界につながる。樗牛は既存す

る社会規範を峻拒し、原初の姿、純粹な自然の感情に回帰する
ことで、絶対的無限の狂の世界に到達することを願ったのであ
る。

若いときから、椽大の筆をふるい、多くの若者に注目される
ことを日常としてきた樗牛が、はじめて「生きる」のではなく、
「生かされている」という自覚を抱いたのである。

「小児のころ」以外に自分を救済してくれるものはないと
いう樗牛の言を受けて、岡崎義恵は次のようにのべている。

「この語は既に謙讓である。死を前にして往年の客気は斂ま
り、澄み透つたものを感じさせる。秋天に漂ふ残照のごとき静
寂の色をさへ見る。野性的自我もここにおいて小児の姿に醇化
され、神に近きものとも思はれる。彼も亦遂に宗教を持ち得た
であらうか。『吾人は須らく現代を超越せざるべからず』とい
ふ語は、単なる大言壮語ではなかつたと思はれる。」〔高山樗
牛論〕『高山樗牛・片山伸・島村抱月・生田長江集』〔現代日本
文学全集(59)〕筑摩書房、昭和三十三年)

この岡崎の樗牛評価は甘すぎるといふ批判も強い。樗牛はい
つまでたつても、他人に忘れられるのがこわい。常にほめられ、
拍手喝采をあびていなければ淋しいのだという人も多くいる。
秋山正香は次のように酷評する。

「藐然として天地の間に嘯く、などとは嘘っぱちも甚だしい。

見栄坊の樗牛は、先の、姉崎嘲風に宛てた、七月三日付の書簡

で、思わず洩したように、『人々に忘れられ』ることを、何よりも恐れていたのだ。むろん、以前とは違った心境ではあるが、やっぱり、絶えず、ひとびとから喝采を送られていないと心淋しくてしかたがないのだ。』（『高山樗牛——その生涯と思想』積文館、昭和三十二年）

秋山ほどの酷評が適切であるかどうかは問題があるが、ほぼ同時期に死を迎えた真宗大谷派の僧、清沢満之（明治三十六年没）などの如来にたいする徹底した自力の無力、無効の境地と比較すると、樗牛はたしかに甘いかもしれない。

生死にかかわる問題が、相対有限の世界で解決できるものではないということも樗牛も知っていた。だからこそ、彼もまた、絶対無限を願ったのである。しかし、彼の宗教的関心というのは、あくまでも思索であり、同情であって、最終的に彼自身が信仰者になるということはなかった。

清沢満之は時の宗教界の墮落、腐敗を見るに見かねて、僧侶の道の原点に帰るべく、徹底した求道生活を自分に課し、精神も肉体もあるものすべてを削ったのである。自分全体の摩滅に必死の覚悟であった。

彼には明治三十六年五月三十日、死の直前に書いた信念の告白ともいべき「我信念」がある。自分の知性とか思索のすべてを燃焼し尽くして、はじめて自分の無力ということがわかってくるという。

研究とか論理で宗教を理解するとか、建て直しをするとかを考えている間は、真実はわからないという。

日に日に苦しさを増してくる病魔の恐怖に、樗牛は不安、絶望の淵に何度も立った。そのたびに彼は、それを超克しようとして、世俗を超えた強力な精神を欲した。しかし、ついに彼は自分を信仰の世界に没入させることはできなかった。

主要参考・引用文献（高山樗牛の著作は省略）

秋山正香 『高山樗牛——その生涯と思想』積文館、昭和三十二年

高須芳次郎 『人と文学・高山樗牛』偕成社、昭和十八年

赤木桁平 『人及び思想家としての高山樗牛』新潮社、大正七年

宮島肇 『明治的思想家像の形成』未来社、昭和三十五年

宮川透 『近代日本思想論争』青木書店、昭和三十八年

橋川文三 『標的周辺』弓立社、昭和五十二年

渡辺和靖 『増補版・明治思想史——儒教的伝統と近代認識論』

ぺりかん社、昭和五十三年

『高山樗牛』『中央公論』特集、明治四十年五月

重松泰雄 『樗牛の個人主義——『美的生活』論をめぐる——』

『国語国文』第二十二卷第五号、京都大学国文学会、昭和

二十八年五月

室田泰一「高山樗牛の思想」『岐阜大学研究報告——人文科学』、

昭和二十九年八月

広島一雄「豹変について——高山樗牛の場合——」『文学論藻』、

東洋大学国語国文学会、昭和四十年十一月

(この拙論は「日本主義と美的生活論——高山樗牛」『日本近代思想の相貌』晃洋書房、平成十三年、所収を大幅に修正したものである。)